

精神病態医学分野

社会構造や産業の高度化につれ、今後ますます精神神経疾患の有病率が増えると予想され、「脳とこころの健康大国」が健康・医療分野の成長戦略の一つの柱となっている。精神医学は、重度の精神病の医学として誕生したが、いまやその対象疾患は大きく広がり、また介入時期も早期発見と発症予防へと前進した。対象年齢においても、周産期から乳幼児期、思春期、成年期、老年期、そしてエンド・オブ・ライフ（死の医学）にわたる。

当教室も、子どものこころの診療部と認知症疾患治療センター（神経内科と協働）でライフサイクルの両端をカバーし、主力は成年期疾患を対象として、紹介されてくる難治性疾患の診療に従事している。外来には、強迫症、気分障害、成人の発達障害、てんかん、社会的ひきこもりのための専門外来を設置している。また、入院している他の診療科の患者が併発しやすい、抑うつ・希死念慮、不安、幻覚・妄想、せん妄などへ対応するため、精神科医、看護師、臨床心理士からなるリエゾンチームがこれらの対応を一手に引き受けている。さらに精神科医は、病院を離れ、産業医やカウンセラーとして学生の修学相談や学生・職員のメンタルヘルスの相談を受けている。

ウェストウイングに置かれた現在の病棟は、保護室、閉鎖・開放病棟、身体合併症病床を備え、措置入院から身体合併症にまで対応できる治療環境をもち、全国有数の医療を提供している。ちなみに、当教室の開講は1906年に遡り、当時の病棟の様子は小説ドグラマグラの舞台として描かれ、今もその面影に触れることができる。また、大切に保管されている古い診療録は、日本の精神医学史研究の貴

重な資料としてアーカイブ化の対象とされ、今に生きている。

次に教室の研究の一端を紹介する。現在、日本学術振興会（科研費 A、2つの新学術領域）、AMED（脳科学研究推進プロジェクト、障害者対策総合事業）などから研究費を得て、また必要に応じて国内外のトップレベルの研究室と連携しつつ、精神疾患の神経基盤の解明に挑んでいる。たとえば、脳生理研究室では、統合失調症および気分障害にみられる認知機能障害の神経生理学的マーカーを明らかにし、これらの知見をハイインパクトジャーナルに報告してきた。分子細胞研究室では精神疾患の病態にミクログリアの異常を明らかにし、患者の末梢細胞からミクログリア（国際特許出願）あるいはニューロンを誘導する革新的技術を確立し、その臨床研究への応用へと進んでいる。行動療法研究室は、強迫症・ためこみ症に特化した治療法の開発と疫学研究、生物学的研究を継続的に実施し、本邦においてこの領域をリードしている。さらに、老年精神医学研究室は、久山町研究の認知症プロジェクトに2005年から参加しており、生活習慣とアルツハイマー病との関係を浮き彫りにした画期的な研究にキープレイヤーとして貢献している。

教室には、毎年10名前後の後期研修医が新たに所属し、20名強の大学院生が常時在籍している。和気藹々とした雰囲気の中、歴史と伝統を誇りに、新たな精神医学を築くことを目標として、また来たるべき時代に合わせて変化できる教室として、さらに発展しようとしている。

文責：神庭 重信（教授・慶大医 昭55卒）